

幼年期の社会性形成

日曜日に「教育社会学」の単位修得試験を受けた。

11月は過去問の論述をほぼ毎日書いていたので、もの忘れが激しい頭脳でも、世の中の事象が「社会学」のフィルターで見えてしまうからおもしろい。

先日、ツイッターを眺めていたら、以下のようなツイートがあった。（内容は少々変えてある）

「ある学生がゲームセンターでゲームに戸惑っていたら、小さな男の子が『教えてあげる！』といって寄ってきたので、教えてもらっていた。すると、男の子の親が来て、『知らない人と一緒にいちゃだめ！何されるかわからんよ！』といいながら俺を睨んだ。」

さあ、これをどう「読む」か？！

最近、集合住宅内に住む小学生に対し“住民への挨拶をしないようにする取組”があるらしい。

そのまま読むと変なことだが、今、世の中で起こっている事件を見る限り、このような対応をしないと危険が想定される状況だ。かわいい子供を育てる保護者にとっては当然と思われる今日この頃だ。

この事案を社会化または人間の社会形成の視点から考えると、なんともいえない思いが湧いてくる。

人は、生を授かり、通常、第一次集団（親子、家族、近所）との間で第一次社会化が行われる。

生まれたら身近な方々との接触の中で、わがままを抑えたり、人とのつきあい方など世の中のルールを学んでいく。この人と人との接触が、人の成長に大変有効であるらしい。

近年、この第一次社会化が十分でない子供が学校（という集団）へ進む。学校は、同学年どうし、異学年どうし、児童と先生（大人）の関係、つまり第二次集団（異業種、異世代、異なる思考など）への移行を意図的、計画的に形成するところである。この子供は、社会へ出る前に、学校で人との接触到課題を呈するようになり、状況が改善しなければ、学齢期にまたは社会に出る時期にますます解決が難しい課題を残すこともある。

これらからすると、幼少期における他人との良質な関わりを持たせることで、子供は良好な発達をし、社会性を身に付けることになるのである。

先の事例について振りかえってみよう。子供は積極的に学生（大人）と接触してゲームの仕方を教えてあげようとし、学生もうれしかった。これは良質な接触であったと考える。しかし、親がこの状況を十分に把握していたのかどうかは不明だが、いきなり、『知らない人と一緒にいちゃだめ！何されるかわからんよ！』と言って睨むのは如何なものかと思う。親の方が年齢に応じた社会性を十分に身に付けていないのではないかと考えてします。なお、親は家に帰ってから、子供へ知らない人との関わり方を論ずる必要があることは当然のことである。

幼児教育の重要性が話題になっている。制度や施設の整備とともに、まず、家庭、近隣における教育が必要なだろう。